第7回「キリスト教と福祉」研究会

子どもたちの声を聴きとるために

～わたしたち（教会）になにができるか～

2020年 12月7日

村田紋子

はじめに

自己紹介

- 日本キリスト教福音連合
  「キリスト教朝顔教会」教会員
- 児童養護施設で22年間勤務
- 短期大学で7年間保育士養成に関わり
  「社会的養護」等の授業を担当
- 日本社会事業大学専門職大学院で司法福祉を学ぶ

「**刑事施設退所者**の社会復帰支援における
『回復共同体』の意義と可能性について」

- 無料低額宿泊所や精神障害者支援業務を経て
  現在は更生施設・宿所提供施設相談員

(生活保護法)

本日の流れ

1.　自己紹介
2.　問題意識
3. 皆様に考えていただきたいこと
4. 今日のキーワード
「小児期逆境体験」「トラウマとPTSD」「回復共同体」

3. みなさまに考えていただきたいこと

「神のかたち」とはなにか。

「神のかたち」を

より深く知り、

より深く大切にするにはどうしたらよいか

（私たちが、「差別し抑圧する側」にならないために）

⇒クリスチャンや教会として

より良い支援をするためにどうしたらよいのか

・聖書は「誤りなき神のことば」だが
「そのまま」読むと
様々な問題が起きる。
「ソーシャルミニストリー」と
「福音伝道」を両輪とするために
どの様に聖書を
読んだらよいのだろう。

・クリスチャンが、
伝統的にイメージしている
「よい行い」「人とのかかわり方」
について
丁寧に、謙虚に、冷静に
考えていく必要があるかもしれない
ずっと感じています。

・過去の仕事・現在の仕事で
感じていること
「子ども期」は人生の土台である。

4. 今日のキーワード

～支援を必要とされている方々の
「痛み」「傷つき」「弱さ」を理解する、
私や教会が「寄り添う」「支援する」、
手がかりとして～

(1) 小児期逆境体験

(2) トラウマとPTSD

(3) 回復共同体

皆様へのお願い

小児期逆境体験を理解するために
「子どもはどのように発達するか」

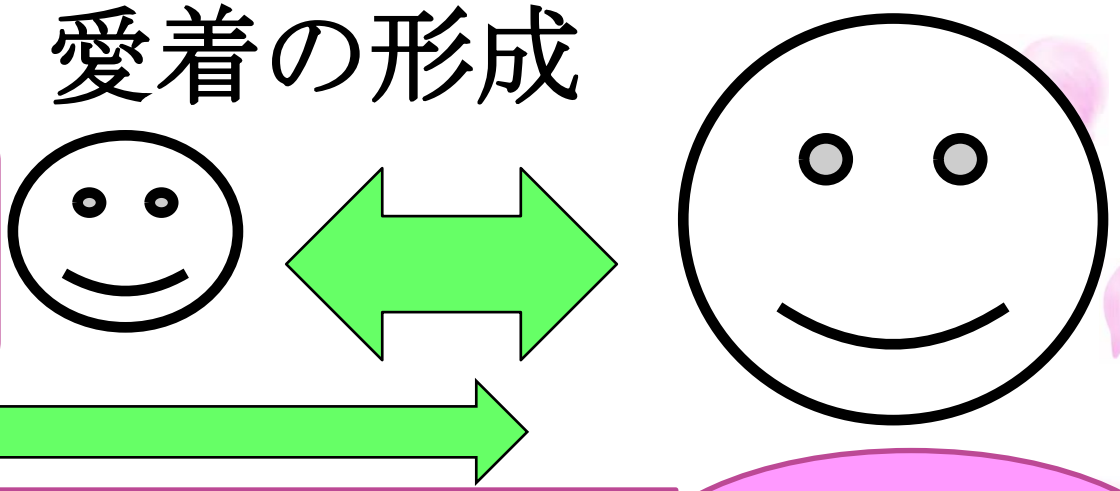
人間の子どもは
人との関係性なくして
成長することは
できません

愛着によって子どもが獲得するもの

探索活動

育てられる者　　育てる者

愛着の形成



・恐怖や不安を感じたら戻り、安心を取り戻す
・エネルギーを得る

安全基地

- 基本的信頼感
  ⇒自尊心・感情・自己調整力
- 外界の知識
- 社会的規範
  ⇒「育てる者」から取り込む
- トラウマからの防波堤

虐待

唯一の頼るべき養育者が
不安や恐怖の源になっている状態。

健全な愛着が損なわれ、
「虐待的絆」を基に子どもが
自己と世界を認知していくことになる。

小児期逆境体験（逆境的小児期体験）（Adverse Childhood Experience ACEs）

・子ども虐待より広義の概念

・「子どもが生きる上で欠かせない安心や安全が守られていない環境」

・「トラウマとなりうる虐待やネグレクト、性被害、機能不全家族等が含まれる 」

※家族の薬物依存、収監、両親の離婚、不在、地域における暴力等

※DVの目撃も極めて影響が大きい。

野坂祐子「トラウマインフォームド・ケア
～問題行動を捉えなおす援助の視点」日本評論社　2020年

小児期逆境体験の予後

・様々な神経発達や免疫系を傷害し、
慢性的な身体疾患や精神健康上の問題を引き起こす。
成長してから深刻な状況に展開してしまうことも多い

例
うつ病、自殺企図、アルコールや喫煙、薬物への依存
虚血性心疾患、脳卒中、肝炎等の罹患率に影響。
寿命も20年短くなる。

・個人や社会に広範囲で有害な損失を与える。
・世代間でも連鎖しやすい。

※亀岡智美「トラウマインフォームドケアと小児期逆境体験」
精神医学61巻10号　2019年10月

4. 今日のキーワード

（1） 小児期逆境体験

（2） トラウマとPTSD

（3） 回復共同体

トラウマとＰＴＳＤ

トラウマ「心的外傷」

極めて甚大な心の傷のこと

その人の身体・行動・認知等に重大な影響を与えるもの

PTSD（Post-traumatic stress disorder）

心的外傷後ストレス障害

「ＰＴＳＤ」の特徴

・想起（フラッシュバック）・回避や麻痺
過覚醒・感情調整の困難等生じる。

・事故や災害等による「単純性（単回性）PTSD 」と
子ども虐待やDV等による「複雑性PTSD」があり、
症状は一部重なるが異なる部分も多い。

・「複雑性PTSD」において、「無力感」
「自己調整の困難」「解離」等が発生するが、
症状は広範囲にわたる。

・子どもの場合、複雑性PTSDの影響が、成長過程において絡み合いながら様々に変化する。
そのために、子どもの「問題行動」「症状」に複数の診断名がつけられ、効果のない治療が重ねられてしまうという事例も多く存在する。
(発達性トラウマ障害)

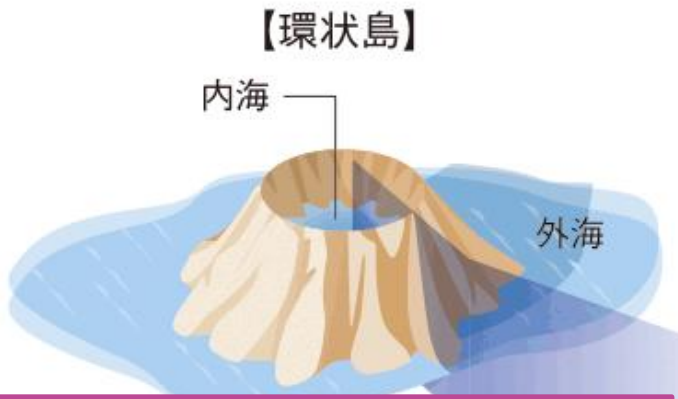
・アディクション行動が「自己治療」の試みとして発生するともともいわれる。
(圧倒的な暴力にさらされ無力感を感じる経験により、何とか自分をコントロールしようとする試みと解されている)

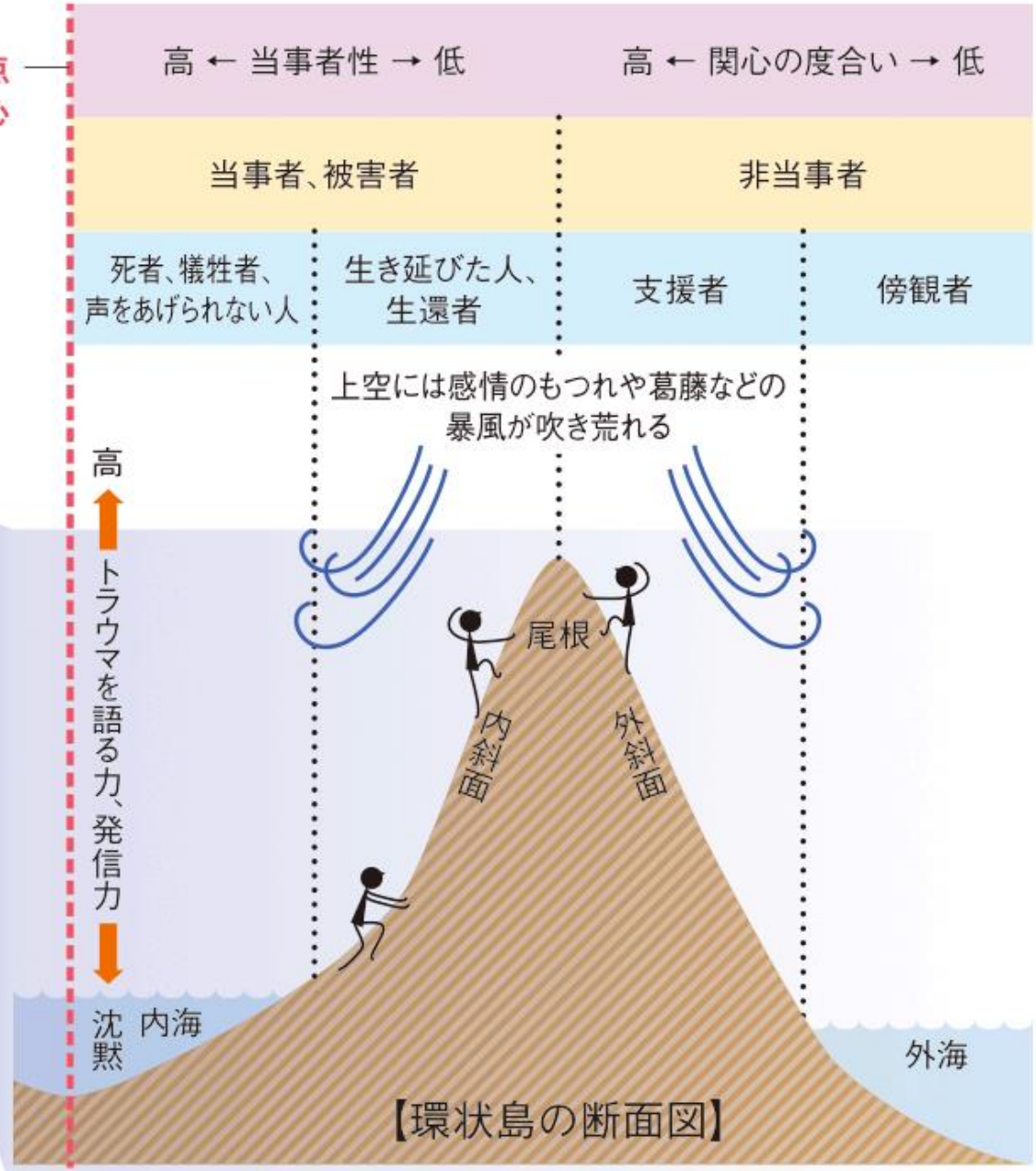
宮地尚子「環状島＝トラウマの地政学」

みすず書房2007年

「トラウマ」や「PTSD」の本質を理解する為
メタファーとして「環状島」を用いた。

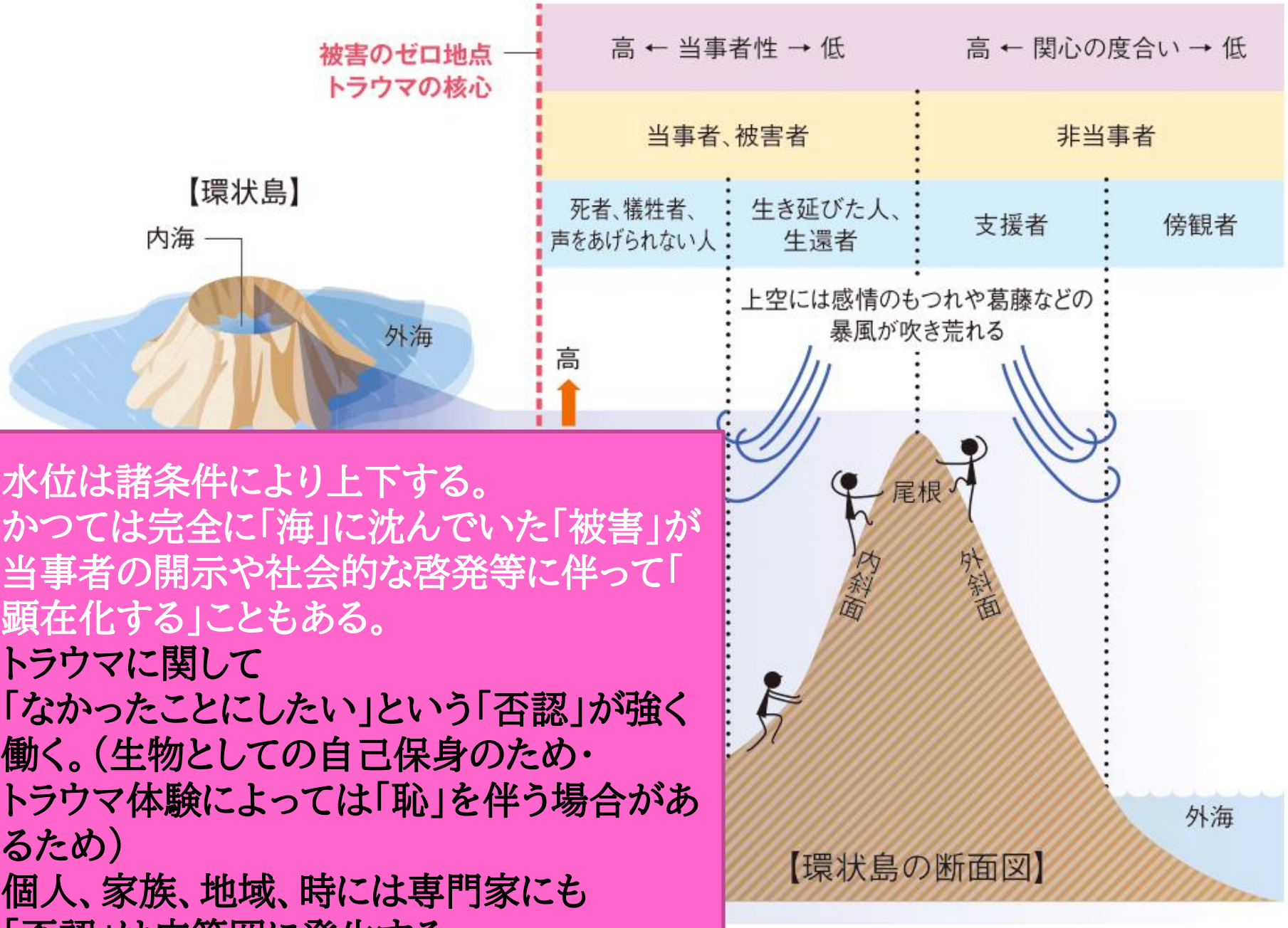
・支援を必要とされる方々の多くが抱えている
　「傷」「痛み」「弱さ」
・支援を必要とされる方々と、
「支援者」との間に生じる、
　様々な問題・葛藤等を明解に示している。





・被害の重さと「語れなさ」は
　比例する。
・「生き延びた人」は「自分が語ってよいのだろうか」という揺れや自責の念を抱きやすい。
（サバイバーズギルト）
・「当事者」と「非当事者」間に「やっぱりわかってもらえない」「本当にあったことなのか」等
双方からの葛藤やもつれが
生じやすい。

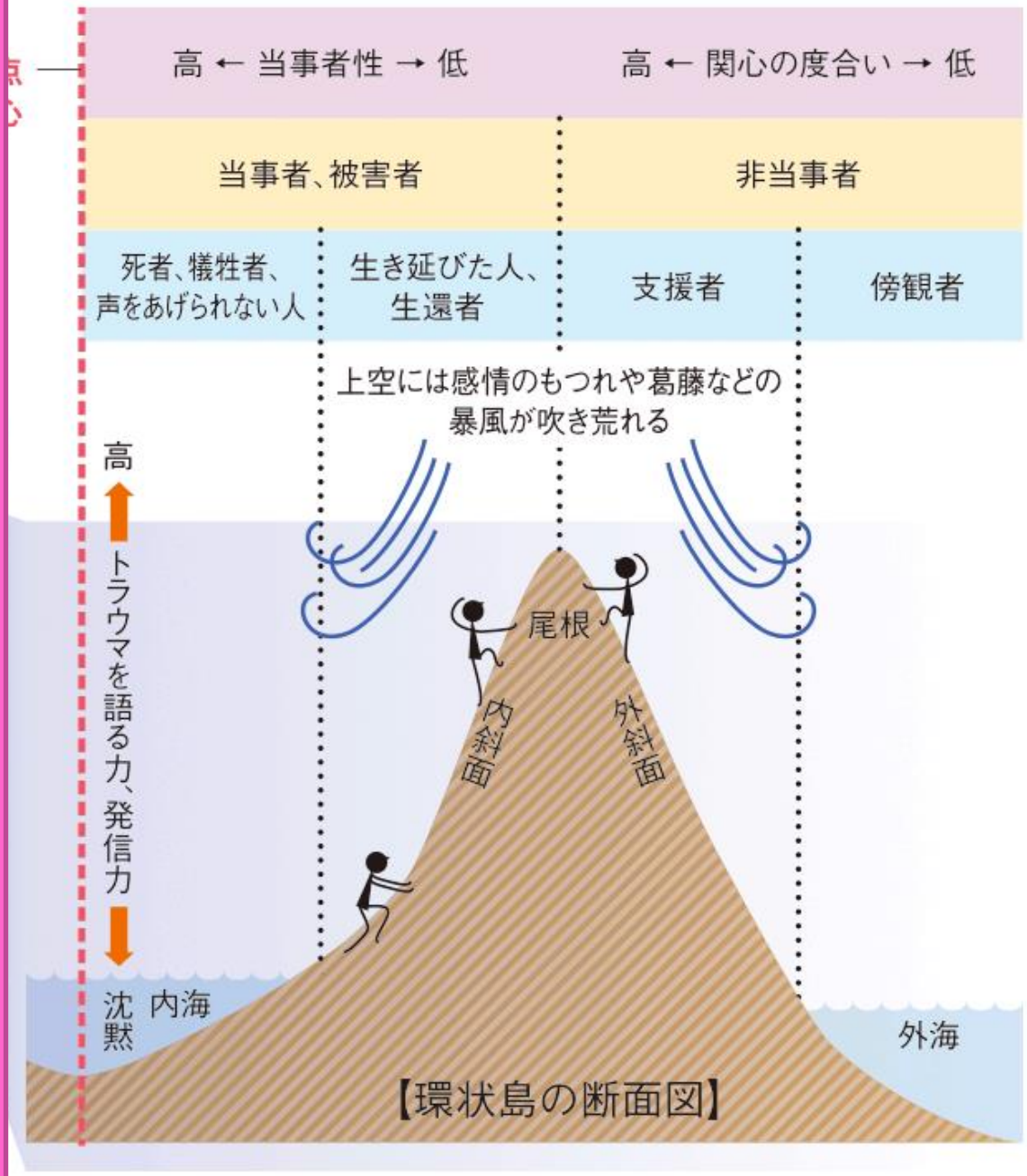
東京都人権啓発センター
TOKYO人権　第51号



と復興ストレス』と『環状島』に所収の図に一部手を加えました。

水位は諸条件により上下する。
かつては完全に「海」に沈んでいた「被害」が当事者の開示や社会的な啓発等に伴って「顕在化する」こともある。
トラウマに関して
「なかったことにしたい」という「否認」が強く働く。（生物としての自己保身のため・トラウマ体験によっては「恥」を伴う場合があるため）
個人、家族、地域、時には専門家にも
「否認」は広範囲に発生する。

・「わたし」「教会」は
どこに位置するのか。
・クリスチャンや教会には、
単なる傍観者ではなく、
様々なトラウマ体験をした方
々に対して、果敢に尾根を
登り支援しようとしてきた実
践の歴史があるともいえる。
・「加害者」が誰であるかに
よっても、「風」の吹き方は
変わるだろう。
（加害者にパワーや社会的
地位等があればあるほど、
風は強くなり、被害者、支援
者それぞれに海に落ちそう
になるかもしれない。）
被害者が「当事者としての
支援者」になったり、支援者
が被害者とのコンタクトによ
って、「二次被害」を受けるこ
ともある。



図の出展：『震災トラウマと復興ストレス』と『環状島』に所収の図に一部手を加えました。

トラウマ・インフォームド・ケア

・ 近年は子ども虐待を、より広義の「小児期逆境体験」という概念で捉えたうえで、
「公衆衛生」の問題として対応しようとする
「トラウマインフォームドケア（TIC）」が提唱されている。
様々な「問題行動」の背後にある「小児期逆境体験」は
気づかれにくく、
支援や治療の過程で、再度その人を傷つけてしまうことがある。
⇒「トラウマの影響を理解した対応に基づき、
被害者や支援者の身体、心理、情緒の安全を重視する。
また被害者がコントロール感やエンパワメントを回復する
契機を見出すストレングスに基づいた取り組み」と定義される

トラウマ・インフォームド・ケアは
まだ十分社会的に認知されているとは言えません。

例えば

・支援者が「支援しよう」と思っても、どんどん遠ざかっていくお母さんの事例。

⇒「なぜ約束を守らずに、面談をキャンセルするのだろう」と支援者が困惑した。「約束を守ってもらおう」というスタンスに。

⇒「いろいろな混乱やためらいを感じて当然ですよね」とお互いに確認し、いつくらいまでに何ができたらいいか一緒一緒に考えてみる。

・病院に行って、大暴れすることになってしまった女性

⇒その方の被虐待歴を踏まえて、必要な説明や方法のすり合わせをすればよかった。

・クリスチャンや教会が
支援を必要とする方々に
近づくとき、
トラウマやPTSDの「機序」「構造」を
理解しておくことが必要。
「この方は子どもの頃、
どのように育ってきたのだろう」
という視点を。

虐待を受けた子ども達が感じていたこと

質問です
虐待を受けた子ども達が大きくなった時に、
どのような場所にいると思われますか。
病院
路上
生活保護関係施設
性風俗関係の仕事場
刑務所
※刑務所の中には、大勢の「虐待を受けたかつての子ども達」がいます。日本の刑事司法施策において、刑罰は強い逆進性があり、そもそも社会的に弱い立場の人たちが収監される傾向があります。
聖書の中の「牢にいる人たち」を考えるとき、つい「冤罪のために収監されている人」をイメージしていたことは、私の反省点です。

羽間京子「若年犯罪者の被虐待体験等の被害体験と犯罪との関連に関する研究」

- 「受刑群」の半数に家族からの被虐待体験があり、家族以外の第三者からの被害も重複している。
- 犯罪に至ってしまった方々への対応において、「被虐待体験を有する可能性とそれらの体験による認知や行動への影響を念頭においた、より的確なアセスメントの必要性が示唆される。」

羽間京子「若年犯罪者の被虐待体験等の被害体験と犯罪との関連に関する研究」
日工組社会安全財団 2018年度一般研究助成研究報告書、20～21頁、23頁

「子どもたち」が何を考えていたか

・虐待を受けた子どもたちは「語りにくく」
「助けを求めにくく」なっていた。

・しかし一方では「助けてほしい」
という思いも持っていた。

⇒

・生活場面でのサインを受け止めていく
必要がある。

・保護はもちろんのこと、
「気持ちを聴く」ことが重要。

研究に参加した方たちから

- 被害体験についてこれまで尋ねられたことも、話したこともなかったが、面接調査を通して語ることで、当時は意識できなかった感情に気づいて内省が深まった。

- 自分の過去を振り返る時間を持つことは大切だと思った。

5. 子どもたちの声を聴きとるために
～必要なことは何か～

ディスカッション

まとめ

子どもたちの声を聴きとるために

(1)　「倫理的」な視点で子どもをみないこと

(2) 教会の中で、
子どもたちを大切にするにはどうしたらよいか、
話し合ってみること

(3) 聖書をよむこと

- 「自己覚知」・「子どもの権利」
- 「チームワーク」を大切にしながら

(4) 子どもの生活と身体を大切にする

（1）倫理的な視点で子どもを見ないこと

・ クリスチャンの立場では
「倫理的であること」を重視する。
・ 「主にあがなわれた者」として、倫理的であることは大切だが、
「倫理的であるべき」という前提で、子どもを見ないようにする必要がある。
そういうおとなの視点を感じると、
子どもは本音を言わなくなる。
おとなの顔色をみて、
自分の本当の気持ちを感じないようになってしまうこともある

（2）教会の中で、子どもたちを大切にするにはどうしたらよいか、話し合ってみること

・子どもに関わることは、親密な関係の中であればこそ、余計に話し合うことが難しい。
・神の「家族」だからこそいえなくなる。
・「信仰」や「みことば」が絡むと
さらに難しい。

「鞭を惜しむな」「親に従いなさい」
「苦しみに耐えなさい」etc.

(3) 聖書をよむこと

①「自己覚知」を大切にしながら読む

「自分の必要のために」

人を助けてしまうことがある。

(自分の弱さを人を助けることで転換したい。

必要とされる実感が欲しい。等)

こういう気持ちは誰にでもあるために、常に細心の注意が必要

(3) 聖書をよむこと

②「子どもの権利」を大切にしながら読む
⇒子どもに「パワーをふるわない」こと

子どもが安心・安全を感じられているか
子どもが自分に関わることについて
必要な説明を受け、
失敗したときにはサポートを受けて、
自己決定を積み重ねていけるか
何よりも「条件付けをされずに」そのままで
大切にされていると感じられているか。

③現場のチームワークの中で読む

- 「否認（正常化の偏見）」をチームで乗り越え、
「何が起きているか」「どう対処すべきか」、
様々な知見を以て判断する必要がある。
- 「ピースキーパー」になってはならない。
（「大丈夫」「何でもない」といって否認を強化する人。
結果的に子どもの被害を過少評価し、問題解決を妨げる。）
- 「足りないところを支えあう」
「二次受傷を防ぐ」という側面もある。
- 「人権」とは何か、
教会の働きを省み、考えるきっかけを与えられる。

チームワークが必要なもう２つの理由

◇支援者側の加害者を防ぐ

～教会の中の「性虐待」

・親しく接するおとなからの

「性虐待」に常に細心最大の注意が必要

◇「信頼」は「個人」ではなく

「チーム」で獲得していく必要がある。

・支援者同士のスクラムにより

誰かが「支援者」として

パワーを持つことを防ぐ

(4) 子どもの生活と身体を大切にする

・トラウマの影響は、身体に及ぶ
(免疫系・脳だけでなく、
身体全体の疾患に影響する)

・身体がくつろぎ、安らぐことによって、
回復しやすくなる。

さいごに

「共同体としての神のかたち」

・神様との「生きた交わり」の
　大切さ。神様から知恵を頂く。

・神の家族　「共同体」
（他者との同調・つながり）の中での
回復

回復のために

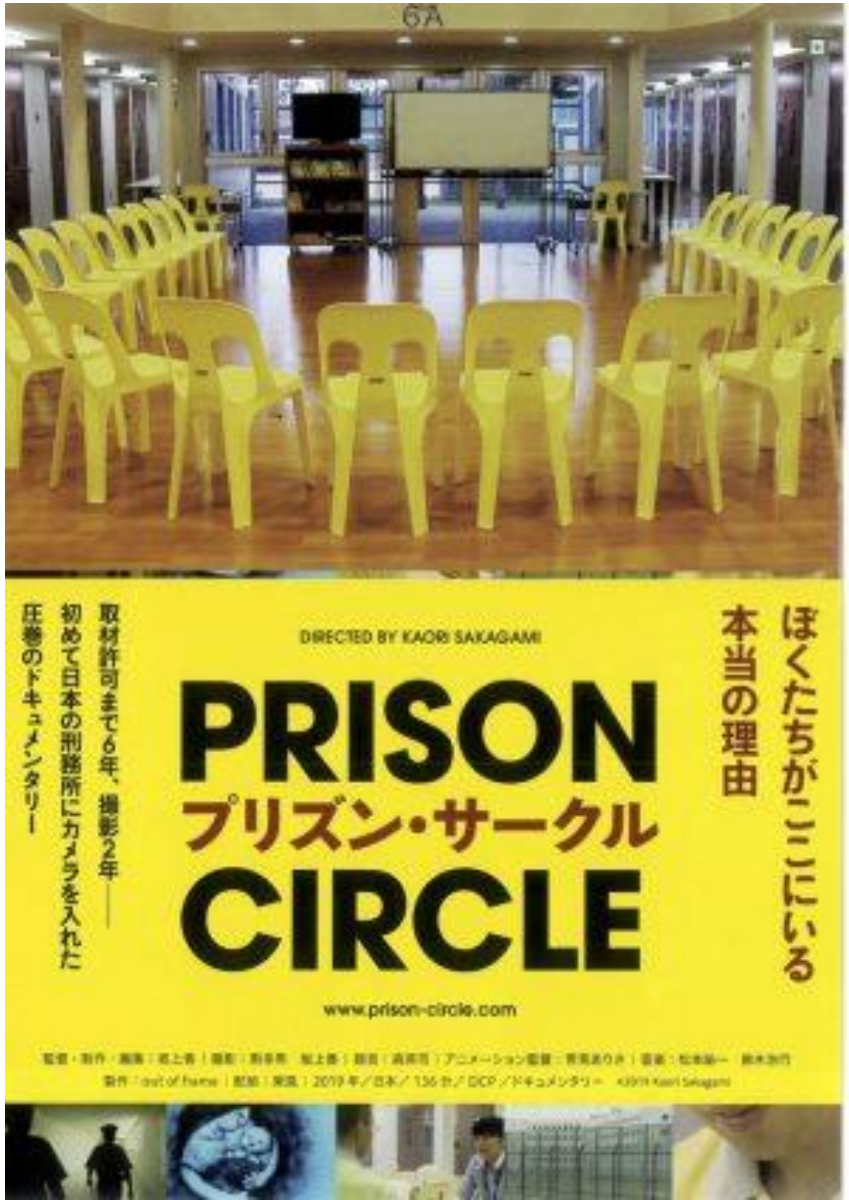
PTG　(Post Traumatic Growth)

「トラウマ後の成長」

この概念については、注意も必要

（苦しみを正当化したり、被害者に押し付けられたりしてはならない）

「回復共同体」



従来の「罰」や「反省」を求める更生のやり方からの転換を試みている。

受刑者たちの「子ども時代」が語られるが、児童養護施設の子どもたちとほぼ同じ被虐待体験がある。

アリスミラーの考えに基づく「回復共同体」という取り組みを通して、封印してきた様々な気持ちを表現し、人格変容を目指す。

「共同体」の中でのPTSDの解決、人格変容を目指す試みとして、アルコール依存、薬物依存に関係する分野では効果が証明されている。

カリフォルニアのRJドノバン刑務所
アメリカの代表的治療共同体アミティが運営するプログラム

坂上香「プリズンサークル」プロジェクトより
https://motion-gallery.net/projects/prisoncircle

坂上香「プリズンサークル」プロジェクトより　「刑務所内のサークル」

「日本の刑務所内TCもアメリカと同様に円形に座って語り合うことが多い。
目指すのは対等な関係。」

「回復共同体」からのチャレンジ

- 教会の中にもこのような場が作れないか
- 「傍観者」にとどまらないために何ができるか

参考文献

宮地尚子
「トラウマにふれる」
2020年　金剛出版
「トラウマ」
2013年　岩波新書
「傷を愛せるか」
2010年　大月書店
「トラウマの医療人類学」
2005年　みすず書房

ご清聴
ありがとうございました